

飛鳥井雅経の『百首和歌』 建仁二年八月廿五日』詠

稲葉美樹

はじめに

稿者は数年前から『明日香井集』を順次読み進める作業を行っており、既にいくつかの論考を発表した(注一)。本稿では、『百首和歌』建仁二年八月廿五日』(『明日香井集』二九四～三八〇)を読み、その特徴を明らかにしたい。

『百首和歌』建仁二年八月廿五日』(以下、本百首)は雅経にとつて、建仁元年(一一〇一)六月頃詠進したと考えられる後鳥羽院第三度百首(後に結番され『千五百番歌合』となる)に続く定数歌である。ただし、本百首の雅経以外の詠進者が管見に入らないこと、本百首中の三首が家集内に重出している(三一八・三五八が『釈阿九十賀屏風和歌』と、三一九が『院百首』建保四年)と重複している)ことを考えると、私的な作ではないかとも考えられるが、この点については後述する。

本百首からは三首が勅撰集に入集している。すなわち、三〇三が『新勅撰集』(巻一九、雑四、一三〇七、詞書「題しらず」、三一八が『統後拾遺集』(巻三、夏、一七六、同「和歌所にて釈阿に九十賀たまはせける時の屏風に」、三四四が『新古今集』(巻五、秋下、四八三、同「擣衣の心を」)で、三四四は『百人一首』にも採られている。

本百首の構成は、春二〇首(二九四～三一三)・夏一五首(三一四～三一八)・秋二〇首(三一九～三四八)・冬一五首(三四九～三六三)・恋一〇首(三六四～三七三)・雑二〇首(三七四～三八〇)である。ただし、雑は七首しか現存しておらず、本百首の実数は八七首である。

本百首には、本歌取詠と歌枕詠が多く見られる。また、本百首以前の雅経の定数歌同様、新しい表現等を用いた歌が少なからず存し、逆に雑歌は本百首以前の雅経の定数歌と大きく異なり述懐歌が多い、といった特徴がある。本稿ではこの四点を中心に検討したい。

一、本歌取詠

本百首には、本歌取詠は三一一首ある。稿者が既に調査した雅経の定数歌における本歌取詠は、正治二年(一一〇〇)の『正治後度百首』二二一首、建仁元年二月の『老若五十首歌合』一四首、『千五百番歌合』三三首となっている。本百首が八七首しかないと考えられると、割合において『千五百番歌合』以上の多さということになり、この四作で言えば詠作年次が下るにつれて増加する傾向がある。

本百首における本歌取詠の特徴をいくつか指摘したい。まず、三一首中、『古今集』を本歌とする歌が一八首あり、過半数を占めて

いる。そのほかの勅撰集は、『拾遺集』・『後拾遺集』・『金葉集』・『詞花集』が各一首であり、『古今集』が突出している。

第二に、本歌取詠が四季歌に多い。すなわち、春六首、夏七首、秋一首、冬四首、恋一首、雑二首で、特に秋歌に多く、夏歌がこれに続く。

第三に、雅経の本歌取は、本歌を取りすぎる傾向があることは既に多くの指摘がある(注二)が、本百首においては、取りすぎと思われる歌も見られるものの、その数は比較的少なく、七首にとどまる。

以下、何首かを取りあげてみたい。はじめの二首は本歌を取りすぎていると思われる例である。

三一八 ひとこゑもいづちはよはのほととぎすまつかとすればあくるしののめ

『明日香井集』一一二三と重複 第二句「いづらはよはの」・『続後拾遺集』卷三、夏、一七六 和歌所にて釈阿に九十賀たまはせける時の屏風に 第二句同右(注三)

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしののめ
『古今集』卷三、夏、一五六、紀貫之)

当該歌・本歌とも夏歌であり、ほととぎすの声を題材とし、夏の短夜を詠んでいる点も共通している。しいていえば、本歌が、横になつたかと思うとほととぎすの声聞こえ、早くも夜が明け始める、という事柄の列挙であるのに対し、当該歌は、まずほととぎすの一声を耳にし、どこへ行ったのかと思って待とうとしているうちに夜が明け始めるという内容で、ほととぎすの声を求める気持がより強

く感じられる点に違いがあるうか。本百首詠作翌年の『釈阿九十賀屏風和歌』に含めていふことを考えれば、ある程度自信のある作であったと思われ、勅撰集入集も果たしている。

三二三 あまのかるもにかすむてふわれからのねをだになかぬな
つむしのかげ

あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかめ世をばうら
みじ
『古今集』卷一五、恋五、八〇七、藤原直子)

この歌も、用語の面では取りすぎていると思われる。しかし、本歌の恋歌を夏歌にしている点、上三句は序詞で、本歌で「藻に住む虫」と歌われる「われから」から、蛩と思われる「夏虫」に主題を転じている点に工夫があるう。以上のように、一見取りすぎと思われる中にも配慮の見られる歌が存する。

次に主題を巧みに転じていると考えられる二首を取りあげる。

三一七 ゆきまよりほの見し野辺の夏もなほむすばほれたる風
した草

みよしのははるのけしきにかすめどもむすばほれたるゆきのし
たくさ
『後拾遺集』卷一、春上、一〇、紫式部)

本歌のまだ雪の残る早春の景を、夏に変えている。本歌で雪に覆われて結ばおれていた草が、夏もやはり暑い風にさらされてしおれている様を詠む。本歌の寒さと当該歌の暑さとの対比が明瞭で、過酷な自然環境の中に生きる草のけなげさが感じられる作である。「風の下草」は他に用例が見られず、雅経独自の表現かと思われる。

「下草」は、木の下など物陰に生えている草の意であるが、ここでは風に吹かれている草をいつているのであろう。

三二一 五月雨におりたつたこのみづからもほしあへぬまでさなへとるそで

袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづからさうき
 (『源氏物語』葵巻、六条御息所)

六条御息所歌は、冷淡な源氏との恋に苦しむ我が身を嘆くもので、田子は自身の比喩である。一方、当該歌は四季詠で、自分を田子であると仮定し、五月雨の中、袖を濡らして早苗を取る様を詠んでおり、内容は大きく異なる。以前、雅経の『源氏物語』受容を扱った拙稿(注四)に、この例が漏れているので、ここで指摘させていただく。

三〇〇 ももちどりさへづりくらす春の日をものうかるねにうちながめつ

春たてど花もにはほぬ山ざとはものうかるねに鶯ぞなく

(『古今集』巻一、春上、一五、在原棟梁)

ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふり行く
 (同右、二八、よみ人知らず)

本百首において、二首を本歌としている唯一の例である。「ももちどり」には、『俊頼髓脳』などによると、多くの鳥の意と、鶯の意とがある。当該歌は、いずれの意とも解することができるが、本百首の二九七番歌に既に鶯が詠まれていることを考えると、いろ

いろな鳥の意か。『古今集』一五番歌で、春になっても花が咲かないがゆえに山里では「ものうかるね」で鶯が鳴くと詠むのに対し、当該歌では、作者がいろいろな鳥の鳴き声を物憂い声として聞いているという内容で、普通なら心が浮き立つであろう春の鳥たちの声にも物思いが晴れない心境を詠む。『古今集』二八番歌は、新年を迎えるとすべてのものは改まるが、自分だけは年齢を一つ重ねて老い古びていく、と詠む。本歌二首・当該歌とも春歌で、晴れ晴れとしない内容である点は共通するが、歌の主題は大きく異なっている。また、「さへづりくらす」という表現は、当該歌のほかには長承三年(一一三四)末頃の『為忠家初度百首』における源仲正の詠に見られるのみである。

以上、数多い本歌取詠の一部を示すことしかできないが、本歌の語句を取りすぎている歌は比較的少ない上、語句は取りすぎと思われても内容等に工夫の見られる作が多い。勅撰集歌を本歌とする二首のうち、本歌と同一の季節で詠む作がここに示したほかにも三首見られるものの、主題を巧みに転じている。それら以外にも、本歌の内容を大きく転じている作が比較的多く、本歌とは異なった和歌世界を構築していると思われる。

二、歌枕詠

次に歌枕詠を取りあげる。本百首における歌枕詠は二八首ある。比較のため調査済みの定数歌三作の数値を示すと、『正治後度百首』二四首、『老若五十首歌合』一〇首、『千五百番歌合』三〇首である。本歌取詠同様、四季歌に多い。すなわち、春一〇首、夏四首、秋四首、冬五首、恋三首、雑二首である。本歌取詠では秋歌が最も多かつ

たのに対し、歌枕詠では春歌が多く、バランスをとる意識があった可能性も考えられる。

詠まれた歌枕の地域を見ると、畿内の歌枕を詠んだ作が一九首と多い。その内訳は、大和国が一〇首で、一首に二箇所詠んだ歌が二首、また、吉野を詠んだ作が四首あり、箇所数は九となる。次いで多いのは山城国を詠んだ五首で、石田の小野と大原が二度ずつ詠まれているので、箇所数は三である。摂津は二首（二箇所）、紀伊と近江が一首ずつである。畿内以外では陸奥国が最も多く、四首（四箇所）、次いで駿河国二首（二箇所）、信濃・相模・越前各一首である。

本百首の歌枕詠は、内容面ではそれぞれの歌枕の伝統的な詠み方を踏襲した作が多いが、新しい要素が付け加えられているものも見られる。それらを中心に見てみたい。

三〇一 するがなるたごのうらなみうらなれてはるかすみのた
たぬ日ぞなき

するがなるたごの浦浪たたぬひはあれども君をこひぬ日はなし
〔古今集〕巻一一、恋一、四八九、よみ人しらず

古今歌の本歌取で、やや本歌を取りすぎているが、恋歌を四季歌に詠み換え、本歌で浦波がたたない日がある、とするのを、春は霞が立たない日はない、と転じる。「田子の浦」とともに詠まれることが多いのは、「波」「あま」「もしほ」などであって、当該歌でも「波」が詠み込まれている。一方、当該歌には「霞」も詠まれているが、当該歌以前に詠まれたことが明らかで、田子の浦と霞とを取り合わせた作は『新編国歌大観』で検索する限り六首しかなく、当

該歌以後の作例の方が多い。

三二四 なつくればこずゑをしげみ葉がくれてせみのなくねはお
ほあらしのもり

この歌は『源氏物語』中の「空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬる袖かな」（空蟬巻、空蟬）を受容して詠まれているのではないかということは既に指摘した（注五）。「大荒木の杜」とともに詠まれる素材は「下草」が多く、動物では「時鳥」が散見されるが、「蟬」との取り合わせは当該歌以外にはない。当該歌より後の、『影供歌合 建仁三年六月』における源通光の作に「ひぐらし」との取り合わせは見られる。さらに、当該歌では「大荒木」に「多」をかけていると思われるが、この掛詞も少なく、当該歌以前の作例は次の二首のみと思われる。

おしなべてみな色色にみゆるかなもみぢするきやおほあらしの
もり
〔為忠家初度百首〕三六三、藤原為忠

暮れて行く秋の名残はおほあらしの森の梢にあり明の月
〔老若五十首歌合〕二七八、後鳥羽院・後鳥羽院御集 一一二（一）

特に後者は、雅経自身も参加した『老若五十首歌合』における作であり、雅経が後鳥羽院歌から学んだ可能性が考えられる。

三六〇 ちどりなくさほのかはらのかはかせにきりはれわたるあ
りあけの月

千鳥なくさほのかはらに霧はれてともまどはさぬ有明の月

『拾玉集』五七二)

「霧」は佐保川の主要な景物であるが、その霧が晴れると詠むのは管見ではこの二首のみである。この慈円歌も『老若五十首歌合』中の一首で、雅経歌はこの歌を念頭に詠まれたか。慈円歌は、「ゆふさればさほのかはらの河ぎりに友まどはせる千鳥なくなり」(『拾遺集』卷四、冬、二三八、紀友則)を本歌とすると思われる、「有明の月」という新たな要素が加えられてはいるものの、内容は友則歌を反転させた作であろう。当該歌は、用語の面では慈円の作と多くが共通するものの、川風を配したことにより、その川風によって霧が晴れ渡り、くっきりと姿を現した有明の月の印象が鮮明である。

雅経は、生涯に京都と鎌倉とを、現在確認できる限り四回往復しており、四度目の下向の際に詠まれた歌群について稿者は検討したことがある(注六)。また、『千五百番歌合』の雑歌は羈旅歌に統一されており、『老若五十首歌合』においても雑歌に羈旅歌が多いなど、雅経和歌の特徴の一つを羈旅歌に見いだすことができ、また雅経自身、羈旅歌に独自性を示そうとの意識を持っていたと考えられる。しかし、本百首における歌枕詠に、旅における体験を反映しているかと思われるものはない。むしろ、羈旅歌と歌枕詠とは同一ではないが、本百首において雅経には、自身の旅の経験を生かして作歌することに独自性を示そうとの意識はあまりないと思われる。むしろその詠みぶりから判断すると、伝統に則った歌枕詠法を習得しつつ、そこに新たな要素を加え、自身の作歌領域を拡大しようとの意識があったのではないかと考えられる。

三、流行表現・新しい表現

雅経が流行表現や新しい表現に敏感であり、また、独自の表現を用いていることは既に何度か指摘した(注七)。本百首にもそれらは延べ一七例見られる。内訳は、流行表現三例、新しい表現一例、珍しい表現七例、独自表現六例である。第一節において、「さへづりくらす」(三〇〇)、「風の下草」(三一七)については指摘したので、それ以外の例を示したい。

三〇二 ながめわびぬ春のかすみにいる月のおぼろけにやは有明のそら

「ながめわびぬ」を初句に置く例は新古今時代に見られるようになり(注八)、以後多用されている。誰の作が初出であるかは確認できないが、新古今歌人では、慈円・家隆・後鳥羽院に各二例、俊成・定家・式子内親王に各一例作例がある。新しい表現であるとともに、新古今時代の流行表現でもある。単に「ながむ」というよりも、より物思いの深さを表出しようとする表現として、好まれたのではないだろうか。

三二八 みそぎがは河なみしげくたちまよひなつはなごしのけふの夕暮

「立ち迷ふ」という語は、『岩波古語辞典』によれば、「(霞・霧・煙などが)立ちのぼってただよう。あたりを去らず立ちこめる。」の意。この語を波に用いたのは、当該歌が最初と思われる。波が

「立つ」というところから、波に応用したものであろうが、人々がみそぎをすることによって波が絶え間なく立ち、水の流れが乱れている状態を表現していると思われ、本来の義とはいささかずれている。そのためであろうか、当該歌以後に「立ち迷ふ」と「波」を取り合わせた作例はあるものの、そのほとんどが「たちまよふ波とかすみのたえ間より雲井にみゆる海橋立」(『最勝四天王院和歌』二二〇、藤原秀能)のように、波と霞や霧・雲との両方に「立ち迷ふ」がかかる用法である。

三七一 きえかへりおつるなみだのたまのをのたえぬとかいはん
袖のみだれに

わりなきは心の外におく露を袖のみだれにかくるなりけり

〔公任集〕三一九

「袖の乱れ」は、当該歌以前にはこの公任歌以外に見られず、後代にも二例しか用いられていない珍しい表現である。袖に涙の玉が乱れ散っている様を表現したものとと思われる。

本稿で取りあげた以外には、流行表現に「霞の袖」(三〇七)、「をかのべの里」(三五〇)、新しい表現に「月ならぬ」(三六八)、珍しい表現に「ゆくへにまよふ」(三三九)、「そらよりかはる」(三四六)、「くもるしぐれ」(三五五)、「わがみあさま」(三六五)、「せれふのたに」(三七七)、独自表現に「はるるこのは」(三五五)、「つきせぬいろ」(三五六)、「しばしのあと」(三七二)、「心ならはす」(三七四)がある。調査済みの三作では、『正治後度百首』が流行表現二三例、独自表現六例、『老若五十首歌合』が流行表現一〇例、独自表現四例、『千五百番歌合』が流行表現一〇例、独自表現

一例となっており、『正治後度百首』・『老若五十首歌合』に比して、『千五百番歌合』・本百首では幾分減少してはいるものの、新たな表現獲得の意欲を失ってはいない。後鳥羽院歌壇に登場した当初ほど積極的に新しい表現を求めているわけではないが、定数歌において二割程度の歌に、流行表現・新しい表現等を用いる方法を確立したかと思われる。

四、雑歌

雅経の雑歌は、『千五百番歌合』・『老若五十首歌合』においては、羈旅歌が多いという特徴を見せていた。本百首においてはそれらと大きく異なり、述懐歌が多い。はじめに七首すべてを示す。なお、前述の通り、家集には「雑二十」と記されているものの七首しか収められていない。この七首において、三七四と三七五、三七七と三七八、三七九と三八〇のそれぞれ二首ずつが、主題に共通性をもつ。

三七四 そむきえぬ我をやつねにまつのかせこころならばすみよ
しのおく

三七五 はてはさていかなるやまにかくれなんよにすむ月のゆく
すゑのそら

三七六 ながむれば月はむかしのかたみかはあましかばの人の
おもかげ

三七七 とにかくにおもふことのみおほはらやせれふのたにに身
をやなげてん

三七八 ややはうきひとやはつらきおほかたはただわれからとお
もひなりぬる

三七九 むかしまでたちかへるべきわが身かはみちあるみよはうれしけれども

三八〇 ことのはをちらしおくこそあはれなくちぬなもあらばとおもふばかりに

三七四・三七五は、遁世の志を主題とする。三七四は、出家を志しながら果たせずにいる状況を詠む。三七五も、表面は月を詠むが、月に託して最後には自分ほどの山に隠棲しようかと、我が身の行く末を思いやる内容である。しかし、三七四では「そむきえぬ我」と打消しの形で、三七五では「はて」「ゆくすゑ」と将来のこととして設定されており、二首ともに遁世を求める心はさほど切実には感じられない。

三七六は、「世の中にあらましかばと思ふ人なきがおほくも成りにけるかな」(『拾遺集』巻二〇、哀傷、一二九九、藤原為頼)を本歌とし、この世にいてくれたらと思う人の面影を月が宿しているように見えるという懐旧の情を詠む。

三七七・三七八は、憂き世を主題とする。三七七は、「世中のかきたびごとに身をなげばふかき谷こそあさくなりなめ」(『古今集』巻一九、雑体、一〇六一、よみ人しらず)を踏まえる。あれこれと物思いをすることが多いので、芹生の谷に身を投げてしまおうか、という内容で、やや観念的ではあるが思いつめた心境を詠む。「せれふのたに」は「芹生の谷」であろうが、「芹生」(表記は「せれふ」のほか、「せりふ」「せれう」)は、ほとんどの場合「大原」を冠し、「芹生の里」と詠まれる。当該歌以外の唯一の「芹生の谷」の用例は、「おぼつかなせれうのたにのほそ道にふみたがへでや君かくれけん」(『閑谷集』六九)である。『閑谷集』は、『新編国歌大観』解

題(青木賢豪氏)によると、「作者は未詳ながら、法体の歌人で、父は京に在り、作者も大原に住んだことがあるが、養和、寿永の頃には加賀、但馬におり、文治元年(一一八五)以後は駿河国「おほはた」に住んだらしい。建久五年(一一九四)父が病没した時を含めて何度か上京もしている。元久元年(一二〇四)一〇月北条政範の死を悼む歌一連、承元元年(一二〇七)同時政発願の堂供養に関する歌などから北条一族との関係が注目される一方、歌会歌らしきものは存するものの中央歌壇との接触は確認し得ない。」とのこと、この作者は、嘉応二年(一一七〇)生まれの雅経より若干年長かと思われる人物である。また、雅経は、文治五年に父頼経が伊豆に配流された後、時期は不明であるが鎌倉に下向し、建久八年二月まで在住している。『閑谷集』の作者が北条氏と関係を持つということであれば、雅経とも何らかの関わりがあった可能性が考えられる。この二首の詠作年次の先後は不明ながら、『閑谷集』の作者が大原に住んだ経験を持つことを考えると、あるいは雅経が『閑谷集』歌から学んだかと思われる。

三七八は、『紫明抄』に見える「よやはうき人やはつらきあまのかるもにすむむしのわれからぞうき」(九四〇)と多くの語句が一致する。ただし、『紫明抄』の成立は雅経没後と考えられ、当該歌は『紫明抄』から学んだものではない。現存しない歌集所収歌でもあろうか。当該歌は、自分が感じているつらさは、世間のせいでも他人のせいでもなく、ただ自身から発したものだと思うようになった、という内容で、作者がつらく思っていることが何であるのかは具体的に示されていないものの、普遍性があり、読む者の心を打つ要素を持つ。三七七のように思いつめた果てにたどり着いた心境を詠んだものであろうか。

三七九・三八〇は、三七八までとは一転して、和歌に関わるものである。三七九はあるいは、「なしつぼのむかしのあとにたちかへりわかのうらわになみのより人」(『千五百番歌合』雑一、千四百二十一番右、源家長)を踏まえるか。家長歌は、『新古今集』撰集にあたり和歌所が設置されたことを寿ぐものであろう(注九)。雅経歌は、勅撰集が編纂されるような正しい政道が行われる御代に逢ったことは嬉しいが、家長が言う、梨壺の昔に比肩されるような力を持つ自分ではない、の意。約一年前に撰者に加えられた喜びを謙遜しながら詠んだもので、挨拶の性質をもつのではないだろうか。また三八〇は、自身の和歌に対する自負を歌ったもので、この百首の末尾に置くに相応しい内容となっている。

以上が本百首の雑歌であるが、本百首にはこれらのほかにも述懐歌が含まれている。それらも検討したい。

三〇三 はなさかでいくよの春にあふみなるくち木のそまの谷の
むもれ木 (『新勅撰集』巻一九、雑四、一三〇七)

三四〇 ひたすらにやまだもる身となりもせじいまやいなばのあ
きの夕つゆ

三六一 あはれなりにほのうきすのうきてのみよるべしらなみあ
ともとどめず

三〇三の、「朽木の杣」と「谷の埋もれ木」という取り合わせは、当該歌のほかは、「としふれど人もすさめぬわがこひやくちきのそまのたにのむもれぎ」(『金葉集』三奏本、巻七、恋上、三九九、藤原顕輔、『金葉集』二度本では歌番号三八三)と、『新勅撰集』(巻二〇、雑五、一三四四)に藤原清輔の長歌があるのみであり、当該

歌は顕輔歌を本歌としたかと思われる。花が咲かないまま何度も春を迎える朽木の杣の谷の埋もれ木に、時に合うことのない自分をたとえ、不遇を嘆く歌である。

三四〇は、現在の自身を「山田守る身」に見立て、このような境遇のまま終わるまい、という決意を表したものである。「山田守る身」には、世間からの疎外感が感じられる。「ひたすら」に「引板」を、「稲葉」に「往な」を掛ける。

三六一は、自身を鳩鳥の浮巢のように寄る辺なく、跡も残さず漂うものと表現している。この歌も「浮きて」に「憂き」を、「白波」に「知ら」を掛けている。

この三首は、谷・山田・水辺と異なる場を設定し、また季節を春・秋・冬として変化をつけながら、不遇な我が身・不安定な自身を歌った作である。

これらのほかにも鬱屈した思いを詠む歌が、三〇〇・三三三・三三四・三四二・三五〇・三五一・三六二に見られる。調査済みの三作では、『正治後度百首』には、歌題による制約はあろうが、述懐歌はほとんど見られず、『千五百番歌合』にもなく、『老若五十首歌合』に三首ほど見られる。本百首の雑歌が二〇首中七首しか現存しないため、断定はできないものの、述懐歌が多いことは本百首の特徴と言えよう。それは雅経の実人生の反映なのであろうか。以下、その点を検討してみたい。

先述のように、雅経は父頼経の配流の後鎌倉に住むようになり、建久八年二月、後鳥羽院の命により上京し、以後京都に住む。『公卿補任』によって、その後、本百首が詠作された建仁二年までの閱歴を瞥見すると、建久八年二月侍従に任じられ、翌九年正月五日従五位上、建仁元年正月二十九日右少将、同二年正五位下、となって

いる。京都に移り住んでから五年余という短い年月しか経過していない中で、前年に右少将に任じられており、特に不遇意識を持つ境遇にはないのではないかと思われる。また、歌壇活動の面では、正治二年以降後鳥羽院主催の多くの歌会・歌合に出詠するようになり、『正治後度百首』・『千五百番歌合』等の作者に加えられ、本百首詠作前年の建仁元年には『新古今集』の撰者の一人に加えられるに至っている。不遇どころか順風満帆とさえ見える状況である。和歌の内容容においても、どちらかといえば観念的な作が多いと思われるので、真に自身の不遇を訴えている訳ではなからう。百首歌には自身の沈淪述懐を訴嘆するという性格があるが、雅経の本百首以前の百首歌にはそのような性格を持つ作はない。雅経は本百首において、今まではない要素で詠作することを試みたのではないかと考えられる。

まとめ

以上、『百首和歌 建仁二年八月廿五日』について、(一) 本歌取詠、(二) 歌枕詠、(三) 流行表現・新しい表現、(四) 雑歌、の四点から検討を行った。その結果、以下のような特徴を見いだすことができた。

本歌取詠・歌枕詠ともに多く、また、本歌取詠は秋歌に多く、歌枕詠は春歌に多いという傾向が見られ、二者を対応させようとの意識を持っているかと思われる。そうであるとするれば、百首歌全体の構成にも注意を払っていることにならう。構成に対する意識は、現存する雑歌が二首ずつ対になっている点、四季部における述懐歌三首が異なった季節・場の歌である点、にも見られよう。雅経の本歌取詠には本歌を取りすぎている作が多いという特徴があるが、本

百首においてはそのような歌は比較的少なく、むしろ主題を大きく転じるなどして成功している作の方が多い。

雅経は、豊富な旅の体験を生かした羈旅歌に独自性を示しているが、本百首における歌枕詠には、実体験を反映していると思われる作はない。伝統的な詠みぶりを基本としながら、その中にも新たな要素を加えた作が多く、自身の作歌領域の拡大を図る意識があったのではないかと考えられる。

述懐歌が多く見られることは、これ以前の雅経の定数歌にはない特徴であり、新しい試みを行ったのではないかと思われる。ただし、末尾の二首は和歌を題材とした作であり、特に三七九は『新古今集』の撰者に加えられた喜びを謙遜を交えて表出したものと考えられる。本百首以前の定数歌同様、流行表現・新しい表現等も少なからず存する。新たな表現の獲得に、後鳥羽院歌壇に登場した当初ほどの強い意欲を持っていたわけではないと思われるが、定数歌において流行表現・新しい表現等を用いる方法を確立したかと思われる。

雅経の、現在知られる最も詠作年次の早い作は「鳥羽百首」であるが、これは一般に私的な作と考えられている(注十)。しかし久保田淳氏は「一応非公的な形を採りながらも」「結局は後鳥羽院の叡覧に供されたものではなかったであろうか。」(注十一)と考察しておられる。本百首もあるいは似た性質をもつものではないだろうか。三七九は後鳥羽院に向けて詠まれているのではないかと思われる。また、歌枕詠・雑歌からは、自身の作歌領域を拡大しようとの意欲が読みとれるように思う。そのような意欲を掻き立てているのは、やはり後鳥羽院の評価に対する意識ではなかったか。本百首は、雅経の作歌の力量の現状を、後鳥羽院に報告する意図をもつ作品ではなかったかと想像するのであるが、いかがであろうか。

注

- 一 ①『明日香井集』「東国下向歌群」(仮称)考(大野順一先生古稀記念論文集刊行会編『日本文芸思潮史論叢』ペリカン社、二〇〇一年)、②「飛鳥井雅経の『源氏物語』受容」(『十文字国文』第九号、二〇〇三年三月)、③「飛鳥井雅経の『正治後度百首』詠」(『日本文学』〔日本文学協会〕二〇〇四年一月号)、④「飛鳥井雅経の『千五百番歌合』詠」(『十文字学園女子短期大学研究紀要』第三四集、二〇〇三年度)、⑤「飛鳥井雅経の『老若五十首歌合』詠」(『十文字国文』第十号、二〇〇四年三月)。
- 二 田村柳老氏『後鳥羽院とその周辺』笠間書院、一九九八年、二二〇ページ、渋谷康雄氏「正治元年九月四日藤原雅経の『詠五十首和歌』について―本歌取り技法とその表現―」(『愛知大学国文学』第二六号、一九八六年二月)、注一の拙稿③・④。
- 三 引用の和歌本文及び歌番号は『新編国歌大観』による。
- 四 注一の②。
- 五 注一の②。
- 六 注一の①。
- 七 注一の③・④・⑤。
- 八 『式子内親王集全釈』(奥野陽子氏、風間書房、二〇〇一年、四五八ページ)参照。
- 九 ただし、『千五百番歌合』の各歌人の詠進時期は建仁元年六月と考えられている(有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』〔風間書房、一九六八年〕など)が、和歌所が設置されたのは同年七月二十七日である。家長の詠進が少し遅れたか、正式な発表がなくとも和歌所が設置されることは既にある程度知られていた可能性が考えられるか。
- 十 『新古今和歌集の基盤と構成』(有吉保氏、三省堂、一九六八年、八七ページ)、『後鳥羽院とその周辺』(田村柳老氏、笠間書院、一九九八年、二二六ページ)など。
- 十一 『藤原定家とその時代』(岩波書店、一九九四年、一四二ページ)。

* A study of Masatsune Asukai's Hyakushu-waka

** Miki Inaba (Japanese Language and Literature)

キーワード 飛鳥井(藤原)雅経・百首和歌・本歌取・歌枕・述懐歌